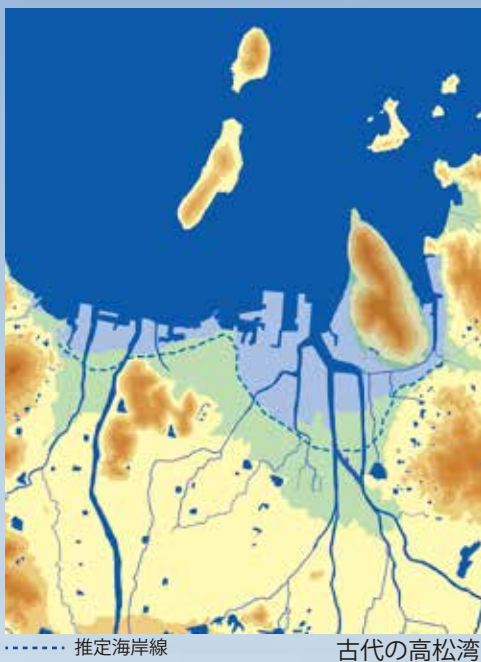


屋島に築かれた山城

古代の屋島は、^{びさんせと}備讃瀬戸に浮かぶ島でした。
島という立地に加え、メサ地形（テーブル地の地形）^{だんがいせつべき}特有の断崖絶壁が発達し、敵の侵入をはばんでいます。また、眺望が利く場所も数多く存在します。メサ地形をつくりだした山頂の安山岩を城壁の石積みにも利用し、谷をふさぐように城壁を築いています。
まさに島と山の二つの顔をもつ屋島ならではの城づくりと言えます。

やしまのき 屋嶋城とは。

屋島は北嶺と南嶺の二つの山からなっています。屋嶋城の遺構が確認されているのは、現在のところ南嶺山上と標高 100m ほどに位置する浦生地区です。



----- 推定海岸線 古代の高松湾



3 北水門

屋島水族館の正面に小さな谷筋があります。この北側から延びる城壁がこの場所で途絶えること、石積み状のものが確認されていることから、この場所にも永口が設けられていたと考えられています。

4 屋島寺周辺

四国霊場 84 番札所屋島寺の周辺は南嶺のなかでも広い平坦地がみられることから、倉庫などの建物が建てられていた可能性があります。境内からは築城の頃の須恵器が出土しています。



2 南水門

四国霊場84番札所屋島寺の仁王門西側の山林に、今も水が集まる谷筋があります。その下にわずかな石積みが残っていましたが、水口は崩落して見づかりませんでした。



6 浦生地区

屋嶋城跡の中で最初に注目された場所で、通称「浦生の石壁」と呼ばれ、全長50mほどの城壁が残っています。平成 21 年度の調査で築城時の須恵器（平瓶）が出土しています。



山上駐車場の北西方向の山林の中に、盛土と石積みで小規模な城壁が築かれています。この付近は瀬戸内海からの眺望もよい場所であることから、本来の正門があったかもしれません。



5 北斜面土塁



編集 / 〒760-0017 香川県高松市番町一丁目 5 番 1 号
高松市
創造都市推進局 文化・観光・スポーツ部 文化財課
高松市埋蔵文化財センター
TEL: 087(823)2714 FAX: 087(823)2715
(屋嶋城関連 HP)
<http://www.city.takamatsu.kagawa.jp/kurashi/kosodate/bunka/bunkazai/chosa/yashimajo/index.html>

発行 / 令和元年 6 月 2 8 日 (第 4 版)



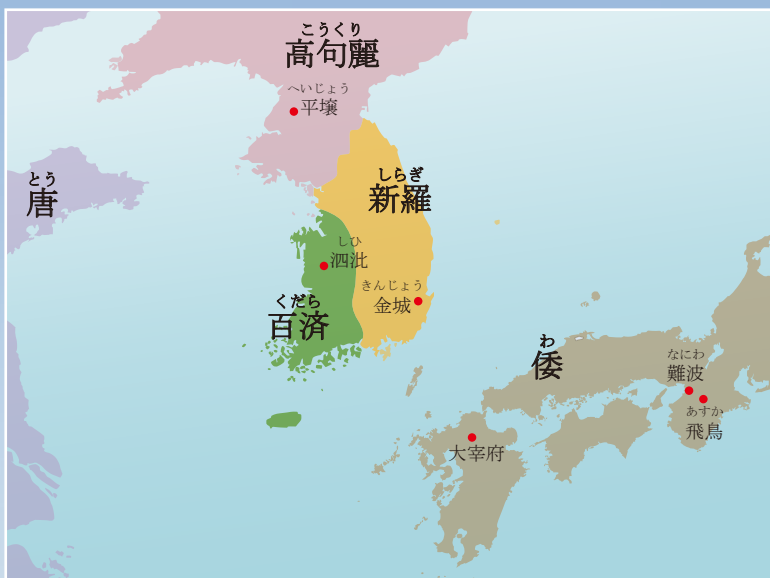
古代山城 屋嶋城

やしまのき 667

The excavation of Yashimanoki, in TAKAMATSU

屋嶋城が築かれた頃の東アジア

今 から 1350 年ほど前、日本は倭という国でした。その頃、現在の朝鮮半島では高句麗、百済、新羅という3つの国が争っていました。660 年に新羅と唐（現在の中国）の連合軍に滅ぼされた百済は、国を復興するために倭に援軍の要請をします。その要請を引き受けた倭の人たちは、朝鮮半島で百済の人たちと一緒に戦いました。しかし、663 年、白村江の戦いに敗れ、百済の人たちとともに撤退しました。



約1350年前の東アジアと倭国



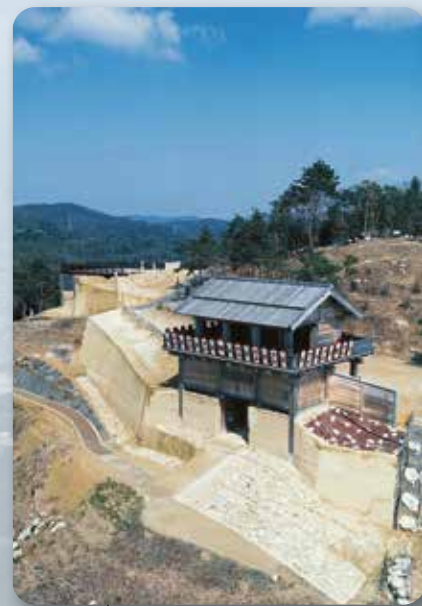
大野城 (九州歴史資料館提供)



金田城 (対馬市教育委員会提供)



讃岐城山 (坂田市教育委員会提供)



鬼ノ城 (総社市教育委員会提供)

なぜ古代山城は築かれたのか？

白 村江の戦いの敗戦後、中大兄皇子は、唐・新羅の連合軍の侵攻に備え、国を守るために、北部九州から瀬戸内海にかけて城を築かせます。その一つが屋嶋城です。『日本書紀』天智天皇六（667）年11月の条には「倭國に高安城、讃吉國山田郡に屋嶋城、対馬國に金田城を築く」という記述があります。



古代山城分布図

修復History

❏ 発掘調査によって、6mを超える城壁が残っていることが明らかになりました。



❶ 解体前の石積み ……約1350年という年月を経た城壁が今にも崩落しそうな状況であることが分かりました。貴重な歴史遺産を未来に伝えるため、2008年から修復工事が始まりました。

❷ 番号付け ……石積みの解体作業は、石積みの石一つ一つに番号をつけ、表面から石積みの現状や当時の技術などについて検討しながら行いました。



❏ 一石ごとにカルテを製作し、大きさや傷などを確認し、積直しに使用できるかを検討しました。



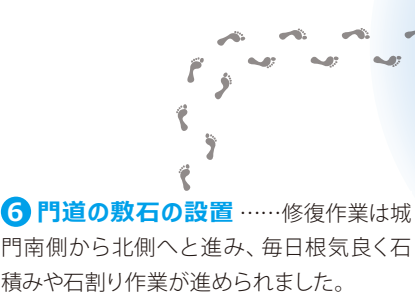
❸ 石積み解体 ……石を一石ずつとりはずしながら、当時の石工さんがどのような作業をしていたか、城壁はどのような構造であったかなどを検討しながら解体を行いました。



解体工事によって城壁の特徴や当時の城づくりの技術が明らかになる一方で、元の姿に修復する際の問題点も明らかになりました。

完成!!

❏ 2015年6月、約1350年ぶりの平成の大修理によって屋嶋城がついに往時の姿を取り戻しました。



❹ 門道の敷石の設置 ……修復作業は城門南側から北側へと進み、毎日根気良く石積みや石割り作業が進められました。



❺ 完成 ……国の防衛と国のあり方を模索し、試行錯誤した時代に生きた「たがまつ」の人々。屋嶋城はその思いを私たちに語りかけているように思えます。

❻ 石積み ……石積みの修復は、本来の位置を石工さんと議論をしながら積直してきました。時には、石工さんと調査担当者との間で見解が合わないことなどもあり、試行錯誤の日々でした。



❏ 積んでは直しの試行錯誤の日々。当時はクレーンなどの機械もなく人力のみで工事が行われました…。当時の人々の仕事のとてつもなくなさに圧倒される日々でもありました。

修復

実験・検討の結果を踏まえ、盛土の強化や排水補強パイプの設置などを実施しました。



『屋嶋城跡の発見物語』

Column1

屋嶋城跡の調査研究は、大正8年の東京帝国大学(現東京大学)の関野貞氏による、「浦生の石塁」をとりあげた論文発表に始まります。その後、昭和60年に村田修三氏(当時奈良女子大学)によって、南嶺北側の山上斜面部にある幅2mほどの平坦面が屋嶋城の土塁ではないかと指摘されました。いずれも年代を具体的に特定することができず、屋嶋城が本当に実在したのかということすら疑問がもたれるようになり、やがて『幻の城』とさえ呼ばれるようになってしまいます。

そのような中、屋嶋城の存在をなんとか解明しようと屋島を探索されていた平岡岩夫氏が、現在城門地区と呼んでいる場所で平成10年に山林に埋もれた石積みの一部を発見しました。この発見を契機に高松市教育委員会が発掘調査を開始し、平成14年に城門を発見し、ついに屋嶋城が実在したことが証明されたのです。

甕城

おうじょう



城門を入ると、岩盤が迫り立つように行く手をはばみ、左手(北側)へと進ませるようになっています。城を守る兵士からみると、侵入してくる敵の横から矢をかけられる仕組みになっています。岩盤の高い場所には半円形状に縁取るように石積みがあり、兵士が隠れる場所や通路となっていたと考えられます。江戸時代のお城にも、虎口や枡形と呼ばれる同様な構造が城門の奥に設けられています。

懸門

けんもん



城の入口にわざと2.5mほどの石積みの段差を設けて、敵の侵入をはばんでいます。普段は梯子をかけて出入りをして、敵が攻めてきた際には梯子を外して、外から侵入できなくなっていました。

じょうもんあと

これが城門跡だ。

城門地区は南嶺南西斜面に位置し、城門とその周辺に大規模な石積みによる城壁が築かれていた場所です。城門は国内の古代山城の中でも最大級の規模で、朝鮮半島の城づくりの技術を裏付ける「懸門」や「甕城」などの戦闘時に有効な防御に優れた構造が遺構として残っており、屋嶋城の築城に百済の人たちが関わっていたことを伝えてくれる重要な場所です。



作画：早川 和子

城壁

じょうへき



城門地区の城壁は、すべての面を石積みで築いています。城壁は高さ約6mで、推定高さが7mに及ぶ箇所もあります。地形に沿って城壁が築かれているため、城壁はくねくねと蛇行しているような点も特徴です。城壁の石積みには、山上で確保できる安山岩が用いられました。数百kgの石材を運び、高さ6mにも及ぶ石積みを築き上げたのです。

『幻の城から謎の城へ』

1350

年のときを経て、その正体の一端が見え始めた屋嶋城。実在したことは明らかとなりましたが、その正体はまだ謎のベールに包まれています。

城門は一つなのか？建物があったのか？兵士はどこにいたのか？いつ廃城になったのか…多くの疑問が投げかけられています。この謎に満ちた屋嶋城の調査はまだ始まったばかりなのです。

この屋島という広大な島に眠る古代山城からまだ目が離せません。



作画：早川 和子

Column2

門

(柱や排水溝など)



城門は、地形を見ると水が集まりやすい場所に築かれており、その多くが約1350年という年月によって流失していました。そのため扉を設置した場所など門に関わる遺構は柱穴4つしか確認できず、詳細はよく分かりません。柱穴の調査から、柱は角材で一辺が30～40cmほどだったと考えられます。また、門の床面は石敷きで階段状につくられ、床下には排水溝も設けられていたことがわかりました。